

## 平成29年度「学校評価実施報告書」京都市立梅津中学校

平成30年3月30日

### 1. 「確かな学力」の育成に向けて

#### (1) 重点目標

学習の意義と目的、また将来どのように自身の社会生活に役立つかを伝え、学習意欲の向上を図る。またわかる喜びと学ぶ楽しさを実感できる授業を目指し、指導方法や指導体制の工夫改善を図る。さらに、定期テストや確認プログラム等の結果を分析・考察し、学力を最大限に伸ばす指導を充実する。

家庭学習についても、その内容を精査し、具体的な方法を示唆し、習慣を身につけさせる。

#### (2) 具体的な取組

①学習する意義と目的、社会との関わりを解説する全校集会を行い、その内容をそれぞれの教科授業で活かす。

②研究授業（全教員が年1回以上）、授業研究（小中合同も含めて）を年3回実施する。その中で、謙虚に学ぶ姿勢を持ち、相互の授業力向上をめざす。今年度も引き続き、言語活動を取り入れた研究授業を実施することとする。個々の教職員のスキルアップを狙う。

③確認プログラム・学習状況調査・定期テストの結果を分析、考察し、学力を最大限に伸ばす指導を充実する。

④学力向上プロジェクト推進委員会、教科主任会、教科会（時間割に組み込む）を定例化し、意見交換を活発に行う。

⑤各教科、宿題を増やし（意識して出す）、保護者を巻き込んだ家庭学習の習慣を身につけさせ、意欲が出る学習内容の充実も図る。

⑥自主学習ノートを全学年で行い、小学校との連携をとり、学習習慣の定着を図る

⑦「ふりスタ」や「みらスタ」を効果的に活用する。

#### (3) 自己評価・分析（成果と課題）

全校集会で学ぶ意義、教科の将来性や魅力を生徒たちに伝え、さらに研究主任発信で、再度各教科の学びが将来につながることを授業で語った。よく伝わった学年ほど、学力に関する数値が上昇傾向を示した。

家庭学習時間が少ないことがわかっており、主体的にこなす課題（自学自習）を与え、継続的に学習する習慣を身に付けさせたが、自分の課題に応じて家庭学習をする生徒が増えた。しかし、忘れ物、課題に取り組めない生徒が依然減らない。来年度への大きな課題である。

言語活動能力・コミュニケーション能力の育成を目指した。また主体的グループ活動の場面を効果的に授業に設定していくことを進めた。小中合同研究授業の機会を上手く利用でき、各教科指導力向上に努めることに繋がった。校内での授業を伴う研修については課題が残った。

学習確認プログラムでは多くの教科で全市平均を上回ることができなかった。教科での分析を利用して、課題を確実にクリアしていく必要がある。生徒の実態や背景をいかに正確に捉え、目の前の生徒に合う授業に改善をする

ことが大切であることは教職員間で共有できており、来年度に活かされると思われる。

#### (4) 分析を踏まえた取組の改善

本校の現状分析を基に進めた今年度の全ての取組を進化させることと、生徒指導が基本となる。ただし、教職員間の多少の温度差や強弱もあり、全体で確認した取組についての効果の検証方法（チェック方法）の工夫が必要となる。

学習確認プログラムは、日程が本校定期テストと被ることや修学旅行前日となることがある。年間行事計画の変更も検討する。

また学習内容の定着に課題があるため、家庭での自主的な学習の定着、前時の復習だけでなく、1ヶ月前・1年前の復習など帯学習の導入など日常的に行うことを検討する。

#### (5) 学校関係者による意見・支援策

家庭学習の時間の短さ、テレビ・ゲーム・SNS等で過ごす時間の長さは、家庭と学校の連携や学校からの働きかけの必要性を表している。学習確認プログラム等で、学力向上の兆しが見えていることについては、学校の落ち着きや取組の効果と言え大変評価できる。

（評価日：平成30年3月26日 / 評価者：学校運営協議会）

## 2. 「豊かな心」の育成に向けて

### (1) 重点目標

落ち着いた学習環境を整え、言語活動を充実させるための「朝読書」をより効果的に定着させ、生徒の心に響く「道徳教育」や、豊かな人間性を育む「人権教育」を実践する。

### (2) 具体的な取組

- ①読書活動を通して言語能力を高めるため、「朝読書」をより効果的に使う。
- ②共によりよく生きるために、お互いの生き方や価値観の違いを認め合い、その良さを伸ばしつつ、共通して守るべきものはしっかりと身につけていく。「やわらかい」けど「芯のしっかりした」しなやかな道徳教育の実践を推進する。
- ③3年間を見通した本校の人権教育のスタイルを継続していく。学年内で係りを中心に十分な準備を行い、学年の実態に応じた人権教育を行う。
- ④いじめや暴力などの問題行動に対しては、毅然とした姿勢で指導を徹底する。そして、「人権」という言葉を意識してあらゆる取り組みを行う。
- ⑤全校道徳（感動体験作文発表会；年間3回）をさらに深化させ、生徒の意見・感想を引き出し、交流することにより、生徒の心をより深く耕す。

### (3) 自己評価・分析（成果と課題）

重点目標の『落ち着いた学習環境を整え』については、生徒会活動を柱とした生徒指導の取組により、校内での

補導問題や遅刻・エスケープが減ったことと、施設・設備面の改修・整備に細かく素早く対応したことにより、達成できていると考える。

『朝読書』については、今年度ようやく3学年とも定着したと言える。これは朝読書開始時間の8時25分についてのとらえ方から、「朝登校してきたら静かに読書を始める。8時25分には全員着席して読書をしている。」と変え、呼びかけたことが生徒にも受け入れられたと思われる。

『心に響く道德教育』については、評価についての研究指定を受け、授業の進め方から評価の出し方まで研修・研究を進めたことにより、再来年度の正式な教科化の不安は少なくなった。

年に3回の全校道德「トークイン梅津」で、代表生徒が発表しているときの全体の雰囲気と、発表後の意見交換の様子からも判断できる。

『豊かな人間性を育む人権教育』については、まず学校評価アンケート「安心して登校できている」に《そう思わない》と回答した生徒が0.1%であったこと、「仲のよい友だちがいる」と回答する生徒は増加していることから、おおそ生徒一人一人の校内では生徒同士で人権は守られていると考えられる。ただしこの0.1%の生徒を見逃すことは出来ない。また過去の同和教育から続く人権教育の歴史を若手・中堅に伝えるべく実施した夏季実地研修や若手・中堅道場での研修の評価も高かった。

また生徒会の「いいことばの日」の取組や「梅津の志」の進化の取組などにより、あいさつ(言葉)や約束・仲間を大切にする心も、指標の数字だけではわからないが、育っていると感じることが多い。

### (3) 分析を踏まえた取組の改善

『学習環境』については、施設・設備面で長年の懸案であった体育館の床の改修と、渡り廊下の屋根の改修(年度末実施予定)の2つが実施できた。次年度は校地を囲むフェンスの修繕を行いたい。また生徒の清掃指導については15分の設定時間を10分に短縮した上、無言清掃や全員清掃などを検討している。

『道德』については、実施する内容項目に漏れはないか、評価は信頼できるものか、さらにその評価は自身の次の授業に活かされるか等の検証を続ける。

『人権教育』については、京都市の教育理念にある「一人一人を徹底的に」に込められた意味を理解し、日々の目の前の生徒の人権を守るため、次年度も実地研修等を計画する。

### (4) 学校関係者による意見・支援策

心を育てる場として、学習環境に関する話題が中心となった。今年度、体育館の床の研磨・ライン引き直し・塗装を行い、また図書室の二足制化とみやこ杣木の机・椅子の導入を行ったが、これに対する評価が高く、生徒の意欲や活気、また学校を愛する気持ちの向上にも繋がるだろう、とのことだった。

(評価日：平成30年3月26日 評価者：学校運営協議会)

## 3. 「健やかな体」の育成に向けて

### (1) 重点目標

食・健康・安全などについての関心を高め、心身の健康の保持促進に対する実践力を養い、また部活動などのスポーツを通して、体力の向上・情緒面の安定、また、知的な発達を促す。

## (2) 具体的な取組

- ①基本的な生活習慣確立に向けた指導と支援を行う。
- ②「食育だより」を活用することなどを通じて、食育を推進することにより、心と体の調和の取れた成長をはかる。特に、朝食を全員がとれるようにはたらきかける。
- ③保健室の意義・目的・利用方法等の指導を通して、自己管理意識を深化させる。
- ④日常的な健康観察を徹底し、迅速な対応をする。必要に応じて、家庭や専門機関との連携を図る。
- ⑤日常の安全点検を行い、常に危険を回避できる環境をつくる。
- ⑥定期的に避難訓練を実施し、安全への意識を高める指導を行う。
- ⑦生活・交通・災害に対する安全教育を充実させる。
- ⑧部活動のガイドラインを遵守し、適切な運用を進める。

## (3) 自己評価・分析（成果と課題）

重点目標の『食・健康・安全などについての関心を高め』については、食主任・保健委員会担当・養護教員などから、様々な形で発信した。結果、朝食摂取率の上昇や体調不良での保健室来室者数の減少傾向が見える。ただし、人間関係のトラブルや些細なすれ違い等に対する耐性の低さやコミュニケーション能力の不足もあり『心身の健康の保持推進に対する実践力』の部分のうち『心』の健康については課題が残った。

『部活動などのスポーツを通して』については、市内大会で優秀な結果を残す部や個人が増え、被表彰数は、昨年度の倍くらいになっている。特定の部や個人の力が向上したのではなく、学校全体としての底上げの結果ではないかと思われる。体育の時間や部活時間帯の怪我也減少していることからわかる。

『知的な発達』とは、体や健康に対する正しい知識を身に付けさせることが必要との思いだったが、達成できなかった。

## (4) 分析を踏まえた取組の改善

家庭の協力が必要なことが多いため、地域や家庭への発進力の向上が必要。また思春期の心身の発達についての正しい知識や、各種運動能力の向上についての理論などを、場面を設定して生徒に理解させる事が必要。

## (5) 学校関係者による意見・支援策

「性」についての情報源がネットとなっており、誰がどこまで理解しているのか、または誰が偏った情報や間違った情報を信じているのかなど、全く見えない。中学生と思われる男女の不審な姿を目撃したことがあり驚くこともあれば、全く幼稚な生徒もいる。

性教育も、そのような温度差の中では難しいだろうとのご意見で、ここはやはり個々の家庭で、自身の子どもの成長具合を見ながら、適切なときに適切な教育をしないといけないだろう、とのことだった。

(評価日：平成30年3月26日 評価者：学校運営協議会)

## 4. 学校独自の取組

### (1) 重点目標

- ①楽しく安心安全な学校。一人ひとりが大切にされる学校づくり。
- ②基本的生活習慣とルールや約束を守る心の育成。
- ③全員参加の活発な授業と進路を考え自ら学ぶ生徒の育成。
- ④「梅津の志」の徹底と「いいことばの日」の進化、愛校心の育成。
- ⑤指示が通り連携がとれ、高め合い補え合える教職員集団づくり。

### (2) 具体的な取組

- ①校門パトロールをはじめとする、生徒を見守る体制を充実させ、生徒の変化をいち早く察知し、問題行動の発生を抑える。
- ②生徒会活動や学級活動、部活動など、様々な場面を通して「自己指導力」育てることを意識した取組を進める。
- ③アクティブラーニングなどの最新の教育情報を的確且つ迅速に入手し、本校の生徒の実態に則した形にアレンジし、魅力ある授業展開を作り出す。
- ④「梅津の志」や「いいことばの日」などの取組を地域に広めることにより、学校愛・地域愛を育む。意見をしっかりと表現・伝え合い、目標をはっきりさせて全教職員で一丸となる。

### (3) 自己評価・分析（成果と課題）

重点目標の『楽しく安心安全な学校。一人ひとりが大切にされる学校づくり。』については、学年が上がるに従って生徒からの評価は高くなった。

『基本的生活習慣とルールや約束を守る心の育成。』については、遅刻数の減少、エスケープ数の激減、校則違反の減少などが見える。生徒会の活動や取組の成果で、やはり生徒の自治能力は大きな影響を与えられた。

『全員参加の活発な授業と進路を考え自ら学ぶ生徒の育成。』の『授業』については、とくに若手・中堅教員に創意・工夫の意欲が見られた。

『進路』の部分は、年度当初の全校集会「梅津の学びオリエンテーション」や日々の授業の中で、今学んでいることが、自身の将来や社会に活かされるイメージが、少しずつ理解されてきていると感じられる。全国調査の結果からも読み取れる。

『「梅津の志」の徹底と「いいことばの日」の進化、愛校心の育成。』については、地域からの評価の高まりや、生徒へのアンケートで梅津中学校の生徒であることを誇りに思う、と回答する生徒の上昇から、成果がわかる。

### (4) 分析を踏まえた取組の改善

全市的に、いわゆる『荒れ』を知らない世代の教員が大半となっている。荒れるのは早く、逆にそこから脱却するためには、相当の時間や労力が必要なことが伝わらず、「これくらい大丈夫」と言う間違った安心感がある。本校でも、基本である『家庭訪問』の軽視や生徒一人一人との関わりの減少、大切なものを見落とすなど危機感の低下

に気をつけなくてはならない。ただし、育児との両立に悩む教員の増加が今後進むため、限られた時間でどこまで徹底して行えるのか、非常に悩ましい。大胆な改革と校務支援員の活用が必要。

また生徒会と校下2校の児童会との交流や合同の取組、生徒の活動を地域に広げることも進め、地域の教育力の向上や理解を目指したい。

#### (5) 学校関係者による意見・支援策

中学生が地域で問題行動を起こすことが、一昔前と比べると、とても少なくなった。学校での様々な取組が功を奏しているのだろう。ただし、公園や(特定の)商店前での行動で気になることは引き続きある。ただし、地域でのそのような行動を一々学校に対応してもらうことは無理なことで、家庭や地域の問題だと言う意見もあった。

(評価日：平成30年3月26日 評価者：学校運営協議会)